優秀賞

私を支えてくれる小さなちから

新潟県関川村立関川中学校
二年　髙橋　まき

「あれは……、なんで……、どうして……。」と、しゃべり始めると小さくてかわいい唇から、ポンポンと言葉が生まれてきます。テレビの内容や自分の好きなことについて、あるいは私たちの会話についてまで、内容は多岐にわたります。気になることがあると、それについて何度も何度も聞いてきます。何度も、何度も……。私の大切な妹は自閉症です。

妹といっても、私の叔母の子どもなので、正確には従姉妹にあたります。小さなころから家も近く、年も二つしか変わらないので、妹のように側にいてくれる存在です。今も、お互いの家に遊びに行ったり、泊まりに行ったりしています。一人っ子の私にとっては、かわいくて仕方がない、とても大切な妹です。

その妹が自閉症だと分かったのは、三歳ぐらいのことだったそうです。「言葉があまり出てこない」「あまり泣かない」「キーホルダーを振るなどの不思議な手の動きをする」このような動作があったそうです。はじめは、少し成長が遅いだけだと思っていたそうです。私の記憶の中の幼い妹は、あまりしゃべらず、ただ私のすることを真似て、ニコニコと笑っているのです。言葉にしなくても、「好きだよ」と伝えてくれているように感じて、それが嬉しくて、一緒に色々な遊びをしたのを覚えています。

そして現在、小学生になった妹は、学校生活や、テレビなどから言葉を覚えました。一回しゃべると止まることなく、質問の嵐がやってきます。簡単な質問もあれば、

「これはどうしてなの？」

「なんでこうしているの？」

など、深い質問も飛んできて、家族全員が返答に苦しみながらも楽しんでいます。一回聞いたことを、何度も確かめるかのように聞いてきます。忘れてしまわないようになのでしょうか。ちゃんと記憶に残そうと一生懸命なのでしょうか。

最近、特に一生懸命なのが、字の勉強です。

「漢字を覚えたいんです。」

と言って、字の勉強を始めました。私も一緒に勉強するときがあるのですが、ドリルをのぞいてみると、心が温かくなるのです。まだ細い、柔らかい線で、一生懸命最後のマスまで書いてあります。その集中力の高いこと。一字一字しっかり時間をかけて、その字を一回書くごとに、声に出し、読み方も書いています。「私も負けていられないな」と思い、二人で一緒に勉強しています。

できることよりも、できないことの方が多い妹。それでも、何かに一生懸命に取り組み、ゆっくりゆっくり成長していく妹の存在は、私だけではなく、家族全員に何かに打ち込むためのちからを与えてくれます。

外出などをすると、やはり周りの目があります。チラチラと見てきたり、明らかにこちらのことについて話していると分かるときがあります。だけど、本人は気付いているのか、いないのか、平然としています。強いのです。私はこの年になると、周りからの目が気になって、不安に感じることがあります。しかし、妹を見てみれば、いつもニコニコ。周りの人は、妹のことも私のことも全て分かるわけではないのです。だから、評判ばかり気にしているようではダメだと教えられました。

妹は、会うたびに手紙をくれます。手紙には、覚えたてのきれいな字が並んでいます。内容は、「大好きだよ」「がんばって」「また遊んでね」などの簡単な一言です。簡単だけれど、なかなか素直には伝えられない言葉。それが、とても嬉しいのです。一生懸命に書いたのが伝わってきます。消しゴムで消した跡が残っていたり、画数が多い字が大きく書かれていたりなどします。私が何かに失敗して立ち直れないときに、この手紙が背中を押してくれます。

大きくはありません。特別でもありません。何気ないちょっとした妹の行動や言葉が、私を励まし、奮い立たせ、ときには慰めてくれます。小さなちからをたくさんくれる妹。それを大きなちからに変えて、私も勉強やスポーツに一生懸命打ち込もうと思います。

作文を書くに当たって

従姉妹は小さいころから私の近くにいて、一緒に成長してきました。そんな従姉妹のちょっとした言葉・表情・行動から、私は知らず知らずのうちに支えられていたと気付きました。普段は気付かないけれど、私たちはとても身近な存在から力をもらっていることが伝わればいいなと思います。